

奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民投句
令和元年十二月度 入選句（投稿総数二千六百六十四句・一般投句数七百十八句）

特選

湧水のまことに清か聖夜の灯

大垣市

吉田 てるみ

「湧水のまことに清か」の措辞で、湧き水の流れ出る美しき、爽やかさ、透明な水を鮮やかに想像が出来る。水都《おおがき》なればこそ、この水の清かさは理解できるだろう。そしてその光景をさらに清々しくしてくれる季語「聖夜の灯」である。流れ出ている水に映っている「聖夜の灯」も、誠に誠に「清か」である。「メリークリスマス」の喜びが、次々とあふれ出てくる。

あの頃のままの朝よ根深汁

大垣市

田中 雅子

季語は「根深汁」である。あの頃のままの朝が来た。いつもと変わらない朝をむかえる。そのことに、平凡な生活と同時に幸せな家庭を見ることが出来る。根深からでる野菜の《甘さ》と同時に《家庭》充分に想像できる。

隙間風漸く解けた方程式

大垣市

中山 あや子

「隙間風」が冬の季語。この句の鑑賞のポイントは、季語「隙間風」と漸く解けた方程式の二つの内容をどのように関係づけ、想像の幅を広げるかである。一般的に《「二句一章」あるいは《「物衝撃」という。ちなみに《取り合わせ》とは異なるが。この句は、二つの内容を、あえて鑑賞する者読者に想像を委ねているのである。皆さんは、どのように鑑賞しますか？私は、「漸く解けた」と「隙間風」に、広い想像が生まれた。冬になると「頭寒足熱」足もとは湯たんぽを置き、頭はなるべく暖めないように机に向かった。隙間風はその頭を冷やす役目だったのだらう。「漸く解けた」というのであるから、ある程度時間がかかったことが分かる。漸く解けたのも隙間風があったからと関係つけることも出来る。鑑賞する人によって、その内容は様々である。《「物衝撃」の句は面白い。ちなみに《取り合わせ》の句は、詠者が意図的に、二つの内容の関係を取り合わせて作っているので、想像の幅は大きくはぶれないのである。

秀逸

見下して見上げて映ゆる谿紅葉

養老郡養老町

田中

秀草

秋惜しむ仕舞はぬままの旅鞆

養老郡養老町

田中

紫香

ふとん干し足の裏まで干してみる

大垣市

井沢

美志津

秋陽受け阿修羅は自在手を拡張

奈良県生駒市

金子

真由美

木の実降る美しき女性もいびきかく

大垣市

野村

みち代

吾もつぶて億光年の冬銀河

大垣市

佐藤

すみ子

いくつもの淋しさに慣れ煮大根

養老郡養老町

佐藤

祥子

今年こそ今年こそはと日記買ふ

揖斐郡大野町

藤田

涼子

おむすびに愚痴をまるめて年忘れ

大垣市

高木

歌佐

真実は冬の日差しに阻まれて

愛知県岩倉市

石川

うしゆ

入選

冬耕の畝の先より暮れにけり 大垣市 樋口 絹子
 冬麗や香煙を手にすくい上ぐ 東京都北区 菱沼 多美子
 寺参り命はかなき木の実落つ 大垣市 桐山 敏子
 いにしへの箱から出でし木の实独楽 大垣市 岩永 フチ子
 木の実落つ音たて又音たて 大垣市 富井 あや子
 木の実落つしじまを破る水の音 大垣市 辻 和代
 打ちとけて言葉は要らぬ温め酒 不破郡垂井町 中西 弘子
 ロずさむ秋の七草指で折り 大垣市 大塚 たえ
 行く秋を追うてみたとして流れ行く 大垣市 堀田 敏郎
 尻もちを恐れぬ園児大根引く 大垣市 傍島 豊子

入選

点滴の小児病棟小鳥来る 大垣市 傍島 隆
 しのび夜の冬の足音杖の先 大垣市 土屋 和馬
 箸袋暮れの句会の走書 大垣市 宮上 美濃留
 幾年を仕舞ひて売地木守柿 大垣市 小林 研
 縄文の土器撫でて行く神渡し 東京都狛江市 椎野 一恵
 看取り女の真夜の足音冬の風 大垣市 辻 シゲ
 草虱キャンパスとなるシャツの胸 大垣市 吉川 和子
 白菜の咎人めきぬ縄しばり 大垣市 早崎 美弥子
 カラカラと落ち葉散る日はレモンティー 宮城県名取市 杜 せき
 掛大根両アルプスへ振り分けて 岐阜市 堀江 美州

選者吟

鮫鱧や不器用に生き捌かれし

永山